

2006年3月17日

竹中正治

周回遅れの映画評論シリーズ

「同性愛カウボーイのラブ・ストーリー:映画“Brokeback Mountain”人気の謎」



【「そんな映画は見たくない！」】

この映画の人気は人づてにじわじわと伝わって来た。しかしゲイ(男性同性愛)カウボーイ同士の「悲劇的なラブ・ストーリー」だと言う。「うげっ！そんな映画は絶対に見たくない」と私は思っていた。しかし、映画の人気は上がり続け、とうとう今年のアカデミー賞有力候補になった(結局、最優秀監督賞を含む3賞を獲得)。当地の知り合いも「もう見たか」「まだ見ていないのか」「きみの意見を聞かせろ」とうるさい。事務所の若い女性スタッフまで「タケナカサンはもう見ました？私の友人達はこの映画、とても素晴らしいと言っているの、私も見に行くことにしました」と言う。ここに及んで私は思い腰を上げ、劇場に行った。¹

【恋に落ちる二人の若いカウボーイ】

物語は1963年にテキサスとワイオミングの二人の若者、ジャックとエニスが羊飼いの仕事で一緒になるところから始まる。馬に乗って、犬達を使いながら、放牧されている何百頭もの羊の群れを移動させるひとシーズンの仕事である。小さなテントひとつで、水道も電気もない原野の中、二人だけで寝起きする。場所はBrokeback Mountain、美しい山河に囲まれている。

見知らぬ者同士として初めて出会った二人は、最初は会話を交わすことも少ない。小さなテントの中で二人で寝ることも躊躇っていた。ある晩、野外で寝ていたエニスは寒さに震える。テントの中のジャックが「来いよ」と招き、テントの中に飛び込む。すると途端に、抑制していた衝動に突き動かされるように、男同士のセックスを交わしてしまう(うげっ！)。こうして二人はひと夏、「仲むつまじく」原野で暮らし、仕事が終わった時には離れ難い関係となっていた。

二人は離れ難い気持ちを引きずりながらも別れ、それぞれの地元に戻る。エニスは地元の娘と結婚し、二人の娘を持つ。ジャックもロデオ大会で知り合った富裕な家の娘と結婚し、息子を持つ。数年を経てからジャックがエニスの家を訪ね、再会を果たす。再会するやいなや秘めた衝動が噴出し、家の裏で抱擁、接吻し合う(再度、うげっ！)。ところがこれをエニスの女房が見てしまい、彼女はひどいショックを受ける。そりゃあそうだ。自分の夫に「愛するボーイフレンド」がいたなんて、目の前真っ暗級のショックである。

エニスとジャックはその後もBrokeback Mountainで逢引きを重ねる。エニスの女房は耐え切れなくなり、二人は離婚、娘達は女房に引き取られる。エニスは養育費を支払いながら、時折娘と接することが許される典型的な離婚男性となる。ジャックは自分の情事を女房には気づかれずにいる

¹ 日本では一般に男性の同性愛をホモ、女性の場合をレズビアンと呼ぶが、米国ではホモセクシュアルは同性愛一般のことであり、男性の場合がゲイ、女性の場合がレズである。

が、エニスが女房との不仲に悩み、ジャックとの関係に躊躇いを見せると、ジャックは欲求不満を起し、ゲイ買春に走ったりする。

結局、エニスは離婚後、トレーラーに住居する貧しい労働者に身を落とす。ジャックはメキシコでゲイ買春を繰り返したあげく、ゲイに対して侮蔑と敵意を持つ地元男性らによって惨殺されてしまう。エニスはジャックの死後、老いた彼の両親が住む実家を訪ね、遺品として彼のジーンズとシャツを貰い受ける。ジャックのジーンズとシャツを手にして、その面影を偲びながら、Brokeback Mountainでの日々をエニスがしみじみと懐かしむシーンで映画は終わる。

【非難の一方で、この映画への賞賛が多いのはなぜか？】

この映画を見終わってから、なぜ多くの人々がこの映画を高く評価するのか、私はさっぱり理解できなかった。勿論、同性愛に対する社会的な非寛容、抑圧が生んだ悲劇のラブ・ストーリーとして、同性愛者らがこの映画を賞賛するのは判る。しかし、それだけであれば極めてニッチな支持に止まり、アカデミー賞を得るまでの人気にはなり得ないはずだ。勿論、保守的なクリスチャンの多くはこの映画を嫌悪しており、地方では上映を拒絶される地域もあるそうだ。解らないのは、同性愛的傾向を持たない人々の中にもこの映画を賞賛する沢山の人々がいることだ。非同性愛の彼ら・彼女らは、なぜこの映画を賞賛するのだろうか？

こうしたアメリカ人らに「この映画の何が素晴らしいのか？」と尋ねても、なかなか要領を得た答えが返ってこない。「映像と音楽が素晴らしいじゃないか」「禁断の愛、抑圧された情念、心の叫びが描かれているじゃないか」、「ふ～ん、そうですかねえ？ もしかしたら、あなたもゲイ？」、「いやいや、私はゲイなんかじゃないよ」

【この映画に対する男女間の評価の相違】

この映画の人気の謎は深まるばかりだったが、この映画に対する非同性愛の(つまり普通の)男女の反応に違いが見られることに気がついた。男性よりも女性にこの映画の支持者が多い。実際、映画の元になったショート・ストーリーを書いたのは女性作家である。これはどういうことだろうか？

一般に非同性愛の男性は、私も含めてゲイのラブシーンに生理的な嫌悪感を抱く傾向が強い。そういう人はこの映画を賞賛する気にはなれない。しかし男性はレズビアンラブシーンには寛容であるか、または性的な興奮を感じる(勿論、美人に限る)。これは男性にとって女性が性的な衝動の対象だからであろう。

一方、女性は「カッコイイ男性」同士であればゲイのラブシーンも受け入れられる。これはちょうど男性の場合の反対であり、理解できる。従って、この映画を賞賛する人が女性には多くなる。興味深いのは、女性にはゲイにもレズにも寛容な傾向が見られることだ。勿論、保守的なクリスチャンでは、女性でも同性愛のラブシーンに嫌悪や不快感を示す人が多くなるのだが、クリスチャン要素のない日本人だと、この男女の相違が鮮明になる。なぜ女性の方がゲイとレズ双方の同性愛に対して寛容なのか？ この問題は難問過ぎて判らないので、今はおいて置こう。

【アメリカ人、日本人の評価の相違】

次に、この映画を賞賛する人はアメリカ人に多く、日本人には少ないことに気がついた。特に日本から派遣で来ている駐在日本人(多くは男性)は私も含めて「何でこんな映画が素晴らしいの？」という反応だった。つまり、アメリカ特有の文化的な事情も評価の背景にあるのだ。

ある晩TV(CNN)の番組を見ていて、ハッと気がついた。性同一性障害者(Gender Identity Disorder)を採り上げた番組で、娘として生まれたが、どうしても自分の性を受け入れることができず、息子として認知上の転換を行った十代の「少年」とその家族が題材だった。「少年」を含む家族全員がスタジオに登場してインタビューを受けていた。「娘さんが『ボクは男だ。男として扱って欲しい』と訴えた時には、ショックではありませんでしたか？」と尋ねるTVキャスターに対して、母親が誇らしげにこう答えた。「確かに最初はちょっと驚きましたが、私達はオープン・マインドでリベラルな人間ですから、それが子供の自然な願いであるなら、そのまま受け入れようと思いました。これで良かったと思っています。」²

アメリカではキリスト教に基づく伝統的な価値観を至上とする保守と、文化的な多様性に寛容なリベラルが文化的、政治的な対立軸をつくっている。保守的な人々は、リベラルな主張は道徳的な退廃につながるだけだと批判する。一方でリベラルな人々は保守派を偏狭な価値観と偏見に満ち、科学的な知見すら否定する人々と見なしている。従って、この映画は保守に対するリベラル・サイドの文化的・政治的メッセージを発信していることになる。次に、このメッセージが映画に対する批判と同時に他方で賞賛を引起すメカニズムについて、更に考えてみよう。

【信仰心の証として失神したクリスチャン】

1974年に映画 The Exorcist(日本語題:「エクソシスト」)が封切られた時、全米各地の劇場で、映画の恐怖シーンに強いショックを受け、気分が悪くなったり、失神する観客が相次いだと伝えられた。当時18歳だった私は怖い物見たさで早速劇場に足を運んだ。しかし「強いショックを受ける」と言われたほどの恐怖は感じず、全く期待はずれだった。映画では、悪魔に取り付かれた少女が不気味な人相に変わり、悪魔払いをしようとする神父らを汚い言葉で罵り、口から汚物を撒き散らしてジタバタと暴れる。怖いよりも汚い。ただそれだけのことである。

同様の印象は他の日本人も多く持った。当時、新聞のコラムで某評論家が「アメリカでこの映画を見て、失神までする観客が出るのはなぜだろうか？不思議だ」と書いた。この評論家氏はこの謎を考えつめ、ひとつの結論に達した。「クリスチャンにとっては、映画の中で聖なる象徴が冒瀆されるシーンに失神するほど強いショックを受けることが、自身の信仰心の証となるのではないか。」

もうひとつ映画から例をあげよう。1981年の映画 The Elephant Man(エレファント・マン)では、19世紀末のロンドンを舞台に、著しい奇形で象のような容姿をした青年が主人公である。彼は場末の見世物小屋で見世物にされていたが、英国医学界のドクターが彼を引き取って、稀な奇形症例として医学会に発表する。こうして青年は英国の知識層、更には社交界の人々に知られるようになる。やがて、彼は醜い容姿の内に繊細な心を持つ青年であることが、ハイ・ソサエティーの人々の話題に上がるようになる。そうすると青年の奇怪な容姿を見ようと彼の病室を訪れていた人々の態度に劇的な変化が見られるようになった。それまで怖いもの見たさで露骨な好奇心を隠さなかったハイ・ソサエティーの人々が、一転して青年のパーソナリティーを賞賛し始めたのだ。すなわち、彼の異形な容姿を受け入れ、人格を賞賛することが、青年を見世物小屋で見物していた卑俗な大衆とは違い、自分らが知的な人間であることを証明するスタイルになったのだ。

【リベラル対保守の踏み絵】

² 念のために断っておくと、同性愛と性同一性障害は別物である。性同一性障害の患者は、自分の肉体的な性を受け入れることができない。一方、同性愛はバリエーションがあるようであるが、総じてゲイの男性は男性としてのアイデンティティーを維持したまま、他の男性に対して性的な衝動を持つ。レズビアンの場合も同様である。

さあ、もうお判り頂けたであろう。要するに映画 Brokeback Mountain は、アメリカのリベラルと保守の文化的な対立軸の中で、自分がどちらに属するかを示す一種の「踏み絵」になってしまったのだ。こうして、保守的な人々がこの映画を嫌悪すればするほど、リベラルを自認する人々はこの映画を賞賛する構図が生まれた。念のために言い添えておくと、私はこの映画に対する賞賛や非難が、リベラルと保守のイデオロギーに基づいた「作為的賞賛」や「作為的な非難」だと言っているのではない。人々は本気でそう感じているのだ。

私の活動しているワシントンDCとその近郊は、勿論、保守もリベラルもいるのだが、分布比率で見ると圧倒的にリベラリストの多い地域である。昨年の大統領選挙ではワシントンDCの有権者は1対9の比率で民主党のケリー候補に投票した。なんと1対9である。「この街はパリか！」と私は思ったほどである。ハリウッドも圧倒的にリベラルに傾斜した世界である。

私は自分も価値観の多様性に対して寛容である社会を支持する「リベラル派」だと思っている。しかし、私の育った日本には、同性愛に寛容であるか否かで、リベラルか保守かに分かれるような米国流の対立軸がない。日本では右左の区別なく同性愛は疎んじられるか、変質者扱いされるだけだ。だから私には自分のリベラルな信条を証明するために、この映画を賞賛する動機がない。反対に、この映画を非難、排撃する動機もない。ゲイは私にとって関わり合いのない僅かな少数派でしかない。同性愛者が日陰者としてひっそりとしている日本の文化的な風土は、やはりアメリカよりも権威主義的なものかもしれない。他方、同性愛者同士が結婚する権利を要求するアメリカ社会はある意味でより開放的と言えるかも知れない。ただしそのことは同時に、同性愛を激しく排撃する人々の存在と対をなしている。

【対立の構図が評価のエスカレーションを生む】

対立の構図があると、人物についても、作品についても、賛否の評価がエスカレートする傾向があることは、私達がよく経験していることである。保守対リベラル、信仰対異教(あるいは異端)、善対悪、聖対邪、愛国対売国(あるいは敵国)など、様々な対立構図の中で人々は特定の事象に対する評価をエスカレートさせる。

靖国神社参拝問題なども、日本と中国の政治的な対立構図の中で、立場を表明する「踏み絵」と化してしまった。その結果、中国の立場からは、日本人が靖国神社を参拝することは「過去の侵略戦争を美化し、軍国主義復活を目論む所業である」と極端にエスカレートした批判に発展してしまった。今の中国人には日本人の靖国参拝を非難することが自分の愛国精神を証明するスタイルになってしまっているのだから、何を言っても無駄である。

欧州の俗流新聞がムハマンドの漫画絵を掲載をしても、「異教徒の愚かな戯事」と思って無視しているのがイスラム教徒にとって最もノーブルな対応だと私は思う。しかし、キリスト教対イスラム教の対立軸が意識され、しかも「イスラム諸国はキリスト教国に圧迫されている」という劣勢意識があると、ムハマンド漫画絵の掲載に対していかに激しく怒り、抗議するかが、自分の信仰心を証明するスタイルになってしまうのだろう。

このような対立軸の中での評価のエスカレーションに遭遇した時、私達はどうかどう対応すべきだろうか？ 片方を支持して、評価のエスカレーションに興じるのもひとつの選択である。人間は敵と味方に別れてやり合うことに意味もなく興奮する動物だ。しかし私としては、対立軸と係わりのない自分の感性に基づいて、こう言っておこう。「それでもやはり、ゲイのラブ・ストーリー映画なんて、見たくないね。」

以上